

# 就職も進学もしない大卒者が年間10万人。ギヤップ・バイヤーは就学力・就業力アップの秘策となるか!?

文科省の調査によると、2011年度の大学・短大への進学率は54%と過去最高を記録。一方で、同年春に大学を卒業した人の就職率は61・6%。進学も就職もしていない進路未定者は10万7134人にのぼるという。

2011年版労働経済白書では、若者の高学歴化が、必ずしも就職につながっていないことを指摘。同時に、早い段階から学生の職業観を養うため、春入試で合格した学生の入学を秋まで猶予する「ギャップイヤー」（以下GY）の導入が有効だと提言している。

GYとは、高校卒業から入学まで、あるいは大学卒業後から大学院進学まで、国内外への課外留学（語学・スポーツ留学）やボランティアの社会体験と就業体験（長期インターンシップ）などを積むこと。9月入学が一般的な歐米では広く行われている。

日本でも、7月に東京大学が、来春から全学秋入学を検討すると発表し、GYの導入についても言及したことでも話題になった。

こうした動きに先駆けて、2011年2月、一般社団法人「日本ギャップイヤー推進機構協会」（以下JGAP）を立ち上げたのが砂田薰氏。JGAPは、日本版GYの導入・浸透によって、日本の明日を担う人材の国際競争力向上等を目指し、啓発活動や政策提言等を行っている。

「2004年の英国の調査によると、GYは大学生の中退率の低下や就学力就業力の向上などにも明らかな効果があることがわかった。また、英国の主要企業250社を対象にしたアンケートで、6割の企業が、採用の際に『学位よりGY経験を重視する』と答えている。日本もGYを大学教育現場に織り込んで、「高等教育のガラパゴスと失われた十年」にならないよう、大学生の国際競争力を高めていくべきだ」と砂田氏。

機運は高まっている。経団連の「グローバル人材の育成に向けた提言」（6月13日発表）ではGYが積極的に評価され、政府による「グローバル人材育成推進会議（議長：枝野官房長官（当

時）」の中間まとめ（6月22日）では、GYについて「普及・促進する」と記述されている。

しかし一方で、大学側には、「新卒者の内定率をどれだけ上げるか」で評価されるという厳しい現実がある。卒業後、GYで留学する学生よりは内定を取る学生を増やしたいのが本音だろう。

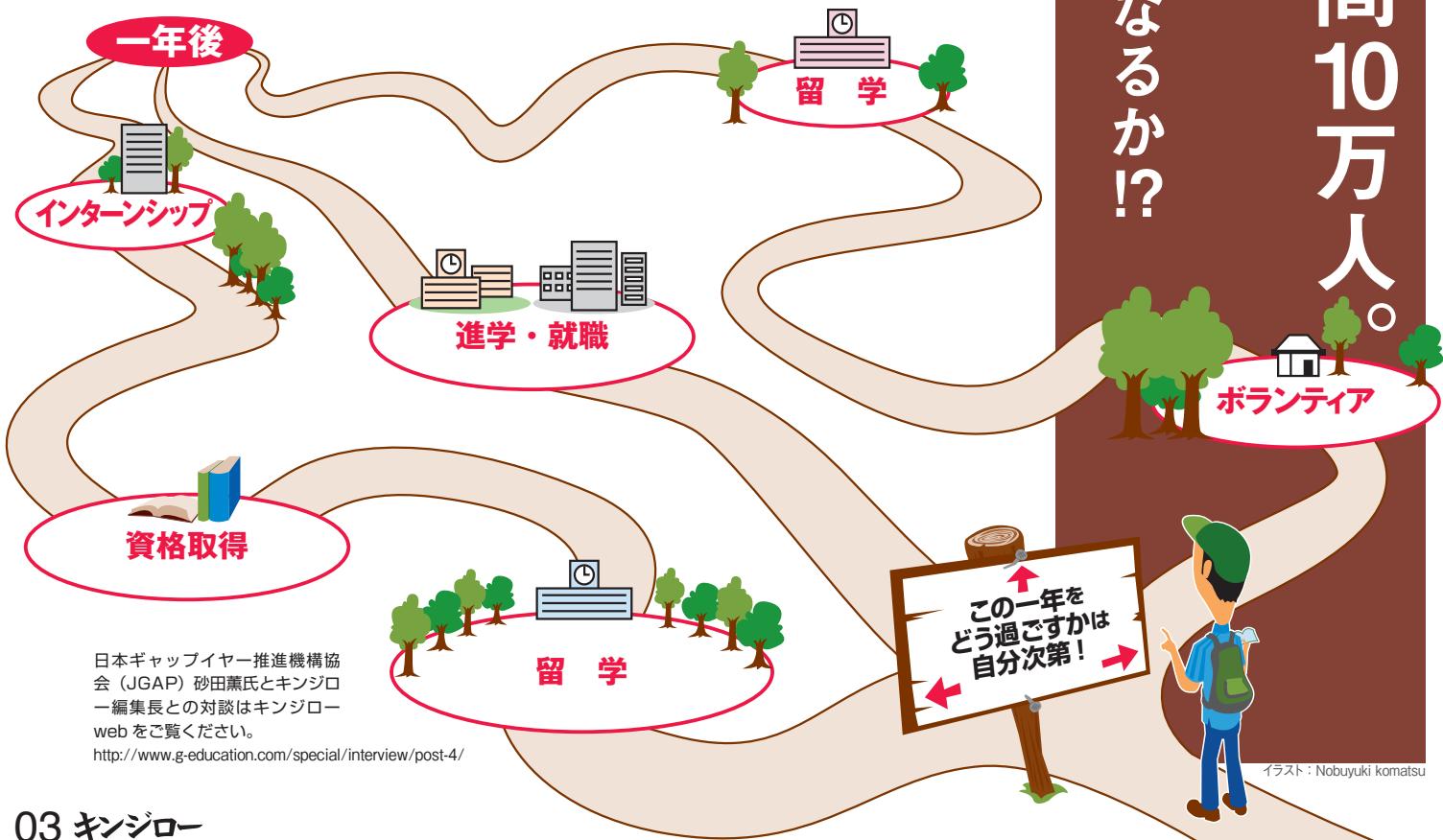
企業のほうも、採用の際にGYの体験をどう評価するのかという新たな課題が課せられることになる。このような中、東大が秋入学とGYについてどのような決断を下すのかは、他大学や企業にとっても大きな関心事となるだろう。

さまざまな面でグローバル化が求められる今、GYは大学のグローバル化にも関わってくる。日本版GYはどこに向かうのか。これからに注目したい。

（イラスト：Nobuyuki komatsu）



日本ギャップイヤー推進機構協会（JGAP）代表  
砂田薰氏



日本ギャップイヤー推進機構協会（JGAP）砂田薰氏とキンジロー一編集長との対談はキンジローwebをご覧ください。  
<http://www.g-education.com/special/interview/post-4/>